第１回富山県総合計画審議会

１　日時　令和７年１月31日（金）9:30～11:30

２　場所　ANAクラウンプラザホテル富山　３階　鳳の間

３　出席委員（五十音順）

　　麦野会長、齋藤会長職務代理者

　　荒井委員、大井山委員、大崎委員、大橋委員、加賀谷委員、片貝委員、

小島委員、佐伯委員、坂井委員、三宮委員、品川委員、大門委員、中澤委員、延野委員、浜守委員、前田委員、松田委員、宮田委員、

村上綾子委員、村上満委員、森川委員、米山委員

（オンライン出席）唐山委員、藤野委員、山辺委員、横井委員

４　知事挨拶

【新田知事】

　おはようございます。本日、委員の皆様方には大変お忙しい中、第１回総合計画審議会に御出席いただきましてありがとうございます。また、日頃から富山県政の推進に対しまして御理解、御支援、また、御協力をいただいておりますことを心からお礼を申し上げます。

　さて、現行の富山県の総合計画である元気とやま創造計画を策定してから７年近くが経過しました。この間いろいろなことがありました。コロナ禍があり、自然災害が激甚化し、そして頻発化しています。能登半島地震の記憶もまだ新しいところです。さらに、昨年４月、富山県の人口が１００万人を下回るという大きな節目もありました。

　このように、富山県を取り巻く環境は計画の策定時から大きく変化しています。同時にデジタル化、ＤＸが加速し、働き方や暮らし方、経済活動のありようも変化するなど、様々な新しい課題への対応も求められているところです。

　富山県では、これらの課題に的確に対応し、さらなる成長と発展を実現していくために、富山県の未来を描く新たな総合計画を策定することといたしました。

　富山県づくりを考えるに際して、経済成長はもちろん重要であります。ただ、その一方で、成熟した現在の日本、また、富山県のような社会においては、ＧＤＰなどの経済規模だけでは必ずしも実感できない豊かさ、あるいは幸せというものもあるのではないかと考えています。このため、県民のウェルビーイングをあらゆる政策の中心に据えて、県民お一人お一人のウェルビーイングが持続的に向上する県づくりを進め、若者からお年寄りまで希望に満ちた笑顔があふれる富山県、ワクワクすることがたくさんある富山県、チャンスがあり夢をかなえることができる富山県を実現したいと考えております。

　新たな計画の策定に当たっては、変化の激しい時代に対応するため、おおよそ１０年先を見据えて、今後５年間の施策の大きな方向性を示すものとしていただければと思います。幅広く県民の皆様の御意見をお聞きしながら、実効性があり、分かりやすい計画を県民の皆様とともに策定し、そして、策定後は県民の皆様とともに実行していく、そのような計画ができればと考えております。

　本日は、本県を取り巻く主な環境変化を、私どもなりにまとめて説明させていただくとともに、その変化を踏まえて、未来に向けてどのような富山県をつくっていくのか、幾つかの視点を示させていただきながら、御意見をいただければと考えております。

　委員の皆様には、豊富な知識、また、御経験の中から忌憚のない御意見、御提案をいただければと思います。

　それでは、本日から、どうかよろしくお願いいたします。

５　議事

（１）組織運営事項（会長、会長職務代理者の選出）

【事務局】

　まず初めに、会長の選出を行いたいと存じます。富山県総合計画審議会条例第６条第１項の規定によりまして、会長は委員の互選により定めることとされておりますが、事務局に案がございますので、申し上げさせていただきたいと存じます。

　経済はもとより環境、観光など幅広い分野に御精通されております麦野委員にお願いしてはどうかと存じますが、いかがでしょうか。

（　拍　手　）

【事務局】

　それでは、麦野委員に会長をお願いいたします。麦野会長は会長席のほうへ移動をお願いいたします。

　それでは、麦野会長から一言御挨拶を頂戴したいと思います。よろしくお願いいたします。

【麦野会長】

当審議会の会長を務めさせていただきます麦野でございます。よろしくお願いいたします。

　今ほど新田知事からお話がございましたように、当審議会の担うべき役割は大変重要であると思っております。皆様のお力添えをいただきまして、大役を全うしたいと思っています。

　また、皆様方には大変お忙しいところでございますが、県民の期待に応えるべく、皆様方の高邁な知見と、そして専門的な知識、これに基づく県の将来像や進むべき方向性についての御意見、御提言をいただきたいと思います。皆様の御尽力、御協力をいただきながら、実効性のある総合計画を取りまとめていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

【事務局】

　続きまして、会長職務代理の指名に移ります。会長職務代理につきましては、条例第６条第３項の規定によりまして、会長が指名することとされておりますので、麦野会長、御指名をお願いいたします。

【麦野会長】

それでは、職務代理者につきまして、富山大学の学長として幅広い知見をお持ちである齋藤委員にお願いしたいと思います。

（２）計画策定の諮問

【事務局】

　それでは、次に、知事から麦野会長に対しまして、総合計画の策定を諮問したいと存じます。知事は麦野会長のほうまでお願いいたします。

　なお、諮問文は資料１を御覧ください。

【新田知事】

（諮問文読上げ）富山県を取り巻く環境が大きく変化するなか、中長期的な視点に立って県づくりの目指すべき方向を明らかにするため、令和１１年度を目標年次とする新たな総合計画の策定を諮問します。

【事務局】

　それでは、ここからの議事進行は麦野会長にお願いしたいと存じます。麦野会長、よろしくお願いいたします。

【麦野会長】

では、会議を始めたいと思いますが、本日の会議の終了時刻をまずお知らせしておきます。１１時３０分を予定いたしておりますので、委員の皆様には会議の円滑な進行に御協力をお願いしたいと思います。

　それでは、次第に従いまして進めてまいります。議題の（３）新たな総合計画の策定につきまして、事務局から説明をお願いいたします。

（３）新たな総合計画の策定について

【事務局】

事務局からは、資料２、資料３につきまして一括して御説明申し上げます。

（資料２、資料３に沿って説明）

（４）意見交換

【麦野会長】

　それでは、これから委員の皆様方から御意見をいただきたいと思います。

　本日は第１回目の審議会ということもございますので、御出席の皆様全員に発言をいただく予定にしております。

　今ほど事務局からは富山県を取り巻く環境変化と課題、それから、県づくりの視点に関する説明がございましたが、各委員の皆様にはそれぞれの立場からお気づきの点や御意見をいただければと思います。時間の都合もございますので、できるだけ簡潔に、そして、お一人様２分をめどに御意見をいただければと思います。また、途中、新田知事からもコメントをいただきたいと思います。

本日は人づくり、産業・社会基盤づくり、魅力づくりというふうに大きく３つのグループに分けて座っていただいております。進行の便宜上このような形になっておりますが、委員の皆様には、このグループの区分にのみならず幅広く御意見をいただきたいと思います。

　また、オンライン参加の委員の皆様には、途中で発言の機会を設けさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

　まず、教育や子供、子育て、福祉、外国人材など、人づくりに関するグループの皆様から始めたいと思います。

（以降、順次指名により発言）

【荒井委員】

　学校法人荒井学園の荒井と申します。よろしくお願いいたします。

　荒井学園は、高岡の高岡向陵高校と、魚津の新川高校の２校の普通科高校を運営しております。私自身は、麦野さんがいらっしゃる北陸銀行に１６年間勤めた後に、荒井学園の運営に関わって１４年になります。

　私が学校教育に関わりを持つまでは、富山県は全国有数の教育県ということに誇りを持っておりましたが、全国いろいろな学校を視察しましたら、富山県の教育が全てではないという思いを抱くようになりました。そして、この多様化と、いわゆる不確実性の高まっている時代に、人づくりという視点から、偏差値に重点を置く教育法にも疑問を抱いております。

　また、先ほどもありましたが、富山県の人口が１００万人を割ってきまして、少子高齢化が進展する中で、外国籍の方々にも富山県に来ていただき、教育も含め生活の基盤を築いていただくことも重要だと思っております。

　私は、富山県公私立高等学校連絡会議等で、公立と私立が条件を合わせて健全な競争をすることで、富山県の教育の魅力化につながるということを常々申し上げてきました。今回せっかくこういった機会をいただきましたので、富山県の人づくりに関わる者として、未来志向でお話ができればと思っております。

【大崎委員】

大崎と申します。私は、社会福祉法人が集まる社会福祉法人経営者協議会の立場から参画させていただいております。介護、福祉の分野から御意見なり考えを皆様とつなげてまいりたいと思っております。

　現在、介護福祉で考えが進んでいること、少しずつではございますが前進していることを、少し御紹介申し上げます。

　まず、地域生活を支えるための医療と介護の連携力を高めること、そして、災害復興時における介護や福祉の役割が非常に重要視されておりまして、この後も災害救助法における重要ポイントがますます進んでいくことと流れがつくられております。

　そして、女性の就業率や女性の活躍の場、これは介護福祉でも非常に重要視されているところ、そして、ヤングケアラーという社会的な問題もございましたが、介護離職に続き、最近はビジネスケアラーの問題がございます。ですので、こういったことをお支えする立場にあるということ、そして、ミドル、アクティブシニア、外国介護人材の取り入れ、多様なケアワーク力を職場に取り入れて、前段申し上げましたような支える力をより高めていくことを進めております。

　そして、現場においては、ＩＣＴ化、ＤＸ化を進めて、より働きやすい職場の推進を日夜続けているところでございます。

　そして、介護福祉支援が必要な御本人を支えること、それがひいては、その御家族の生活や社会活動を支えることになりますし、地域の経済活動や生活、こういったことを支えることにつながると思っております。

　福祉の語源は幸せというところでございます。こういったことを推進することが安心な地域生活をつくること、ひいては真の幸せのウェルビーイングにつながるよう、一生懸命努めているところでございます。

【小島委員】

　富山県保育連絡協議会、小島でございます。

　これまで、子ども、子育ての分野は、安心して子どもを産み育てることができる社会をつくろうということで、ここ３０年間、少子化対策の中で奮闘してきたところでございます。

　富山県は待機児童がずっといなくて、都市部では子育てしづらいと言っていたときも、富山県なら安心して預けることができるというふうになったのも、やはり早くから乳児保育、延長保育、それから、県とともにつくってまいりました休日保育、そして病児保育、さらに今では医療的ケア児の保育、そういう共働きの方が多い富山県の子育て家庭を支える体制はできてきました。でも、子どもは増えていません。これってどういうことなのかとすごく思います。

　子どもが少ないことは私たちにとっても大変危機感はございますが、県政のあらゆる分野で危機感があるのではないかと思います。働き手がいないということは、やはり県の発展を大きく阻害するものだと思います。そういった中で、知事は選挙のときにも言われましたが、こどもまんなか社会を実現することです。これは私ども子ども関係者にだけ言われていることではなくて、全ての分野からこどもまんなか社会を実現していくということが求められていると思います。

　やはり安心して働きながら子どもを産み育てることができることを、あらゆる分野の方と手を取り合ってやっていきたいなと思っています。全国的にどこでも少子高齢化、子どもの出生数どんどん減っています。全国的に見れば７０万人を切ると言われています。富山県も５,０００人前後なんです。これは本当に少ないと思います。そういった意味で、あらゆる分野の方に御理解をいただいて、子育てをしながら働き続ける、このことをともに提携し合っていければいいなと思っています。

　政策の大きな柱として、こどもまんなか社会の実現を希望しております。

【齋藤委員】

　２７枚目のスライドの計画策定に係る検討のポイントというところを見させていただきますと、非常に富山大学の基本方針と似ているなと感動しております。私、６年前に富山大学の学長になったときに、キャッチコピーとして「おもしろい大学」と、おもしろく愉快な大学にしたいということでキャッチコピーをつくりました。２年前に再選されたときに、そこに「“みんなで創ろう！”おもしろい大学」という言葉を入れさせていただきました。これは大学だけじゃなくて、地域も含めた形で、皆さんとつくっていくということが非常に重要だなと思っています。

　それから、上のほうの人口減少と少子高齢化ということがございますけれども、この先１５年ぐらいで１８歳人口は３０％ぐらい減ります。今、国立大学で１５年後に向けた教育改革ということで、かなり真剣に考えておりまして、この教育改革というのは明治維新のときの教育改革、それから、第２次世界大戦の後の教育改革に次ぐものとして非常に重要な課題と考えています。

　今、大学のほうで考えていますのは、数が減るので、やはり質を高めないといけないという形で、大学院教育を重点化するという事です。それから、一旦会社に出てから、社会に出た方の再教育という場を大学で設けさせていただいて、しっかりと最新の知識をつけていただいて、社会にまた戻って活躍していただく、そういう人材をつくろうとしています。

　もう一つは、グローバルな人材です。皆さん驚かれるかも分かりませんが、１５年後の国立大学の努力目標として、留学生比率を３０％にするということが掲げられています。今現在、富山大学に約９,０００人の学生がおりますけど、その３割で約２,７００人、そのぐらいの学生が外国人に置き換わります。今後やはり考えていかないといけないのは、富山を魅力的な、外国人にとっても過ごしやすいまちにしていって、彼らに日本語教育もさせていただいた上で、富山県の地元の企業に就職していただけるような形で、活力を上げていきたいと考えています。

　この中で、こういった将来の富山県の在り方という形で、富山大学も本当に力を挙げて協力したいと思っています。

　それから、今週土曜日に高校生を集めまして情報の発表会がございます。当初、参加校は８つの高校だけだったんですけれども、今もう２８校になりまして、土曜日には２８０名ぐらいの学生さんに参加していただきまして、演題数は７０演題ぐらいに増えました。そこで皆さんが勉強したことを富山大学の大学院生、それから教員のほうも協力させていただいて、発表会をさせていただきます。こういう形で高校生に教育することで地域に貢献したいと考えております。

【佐伯委員】

　　富山県ＰＴＡ連合会の佐伯です。富山県ＰＴＡ連合会は県内小中学校のＰＴＡ活動の充実・活性化を下支えする組織という考えで活動を展開しています。

　この計画策定に係る検討のポイント、今おっしゃっておられた２７ページのところで、ワクワクする富山県という言葉にすごく共感いたしました。昔習ったマズローの欲求５段階説のピラミッドを思い出しまして、そこのピラミッドの頂点である自己実現というところ、ここ富山で自己実現をしていけるという状態がワクワクにつながっていくのかなと思いながら見ていました。

　ＰＴＡでも今現在、それから、将来の子供たちのために何をすれば良いのかということを普段から話し合いながら事業を行っております。まず、学力は人生の基盤だと思いますが、質の高い教育が富山で行われていることにとても感謝しており、これがまた、より良く続いていくことを期待しております。

　それとともに、生きる力、予測困難な時代をどう生き抜いていくかということ、そういう力をつけることが大事だということがＰＴＡでもふだんからよく話題に出ています。「生きる力」がついていく環境をつくっていきたいと、保護者の間でも話しております。それは単純な力強さということではなく、つまずいたときにもゆっくり時間をかけてでも立ち上がり、また歩みを始めることができるようになる強さ、そんな力を、子供たちが持てるようにしていきたいなと思っております。要望書を先日出させていただきましたが、その考えが元にあり具体的な要望につながっています。

　子供たちがどんなときにでも、どんな状況でも、自分には明るい未来があるんだと思えることがとても大切です。そのためには、大人の側、保護者の側にも寛容さとしなやかさ、いろいろな生き方を認め合うということがこれから求められているので、そういうアップデート、大人自身の気持ちのアップデート、「捉え直す」ということをやっていく必要があると考えます。こどもまんなか社会を実現するためには大人のアップデートも必要であるということを、またどこかの視点に入れていただけたらいいのかなと思いました。

　多様な生き方を受け入れ合い、自己実現できる富山がワクワクできる富山につながっていくのかなと思っております。

【宮田委員】

　ＮＧＯダイバーシティとやまの宮田です。

　ダイバーシティとやまは、それこそ多様な人たちが幸せに生きられるという地域づくりを目指してやっているんですが、私、ふだんは富山国際学院という日本語学校の教員をしておりまして、富山国際学院は１９９３年、北陸で初めてできた日本語学校で、もうこれまでに３５か国以上、もう千何百人以上の多様な外国人材がうちの日本語学校から巣立ってきました。もちろん富山に残っていろいろな分野で活躍してくださっている外国人材もいらっしゃいますが、富山から出てしまった人たちも残念ながら多いのが実情です。

　先ほど齋藤学長も言われましたけれども、これから富山を魅力的なところにしていかないと、外国人材、今は呼びかければ来てくれる時代ではないので、富山の魅力を彼らに伝えるためにも、ワクワクする富山県の取組みというのはとても大切だと思います。

　実際、今、富山に自分たちでＮＰＯをつくって活動している外国の人たちもいらっしゃいまして、彼らはパキスタンやシリアの人たちなんですけど、震災が起きたときも真っ先に被災地に駆けつけて、ずっと支援もなさっていますし、町内会の活動にも、町内の人たち、外国人はごみ捨ての問題があるとか、いろいろな声があるんだけど、自分たちから中に入っていって一緒に側溝清掃をしたり、草刈りのボランティアをしたり、そういうことで彼らのほうから地域に溶け込もうと活動をしている人もたくさんいらっしゃいます。ですから、日本の方たちのほうも、そういう彼らのことをもっともっと知っていってほしいです。

　本当に今、地域で働く担い手不足の現状だと思うんですけれども、彼らは安い労働力と考えるんじゃなくて、イノベーションをもたらしてくれる存在というふうに位置づけることが、これからの外国人受入れの基本だと思います。農業の分野でも８０代９０代の人がコンバインを運転している、そんなような状況です。ですから、本当に若い外国の人たちの力を地域に生かしていくこと、そして、多文化共生がキーワードだと思うんですけれども、私たちの側も多文化共生の担い手というのをつくっていくことが、これから大切ではないかと思っています。

　佐伯委員もおっしゃいましたけど、教育の面では生きる力を育む、偏差値教育じゃなくて、本当に生きていく力を育んでいくというためには、同じクラスに多様な人たちがいるということはとても大切だと思います。

【村上（満）委員】

　富山国際大学子ども育成学部というところから参っております村上と申します。よろしくお願いいたします。

　私のほうでは、子ども育成という学部にも所属をさせていただいているところでもございますので、２８ページの資料のまさにキーワードにあります、こどもまんなかとか、教育といったところに非常に関わりを深く持っているところであります。

　また、現場も持っておりまして、社会福祉法人で障害のある方々の働く場の確保というところも研究領域の一つとして持たせていただいております。

　私も医薬大の最後の卒業生でございますので、国立大学の状況もよく分かるんですが、今まさに県内の私立大学の状況というのは、非常に厳しいものがございます。私どもも、それこそ我が身となってどのように今後なっていくのかなという中で、若い女性、高校生が県外に流出するということのないように、県内の大学が、あるいは国立、私立が一体となって、どのように魅力ある学部や研究領域、あるいはフィールドをしっかりと持てているかどうかというところが非常に重要だなと考えております。

　また、こどもまんなかというキーワードでもありますけれども、こどもの権利に関する条例の制定に向けまして、今そういったところにも関わらせていただいている中で、丁寧に子供たちの最善の利益を守るために、どんなようなことが大人、あるいは産官学等々が一体となってやっていけばいいのかなというところを、しっかりと構築させていただくところにも関わらせていただければいいかなと思っております。

　先ほどから、齋藤学長をはじめ様々な委員の方もおっしゃっておられますように、しなやかでワクワクする富山県のためには、人をきちんと認める、尊重する、リスペクトができる、そのためにはパソコンの中でできるものの限界、生成ＡＩの限界もあるんですが、やはり人の心というものを考えたときに、ハードディスクではなくて、ハートディスクの容量をどれくらい広げられるかというところが非常に難しくもあり、また楽しさもあり、そこがワクワクするポイントにもつながってくるのかなと思っております。

　障害のある方、あるいはいじめや不登校、いろいろな子供たち、多様性を持った可能性のある子供たちに、どんなふうにハートディスクの容量を広げられるようなことが、この計画の中に落とし込めるのかなというところに、少しでも関わらせていただけたらと考えております。

【横井委員】

　おはようございます。横井です。

　自己紹介を簡単に申し上げますと、高校まで富山におりまして、それからずっと大学を卒業してから外務省というところにいて、５年前に退官しました。ずっと富山を離れていたんですけれども、世界中と言うほどでもないですけど、回ってきて発見したのは、富山というのは世界的に見ても相当いいところです。高校のときにはやはり世界を広く見たいなと思って出ていきましたけれども、ずっと回ってきたら、本当にこんないいところはないなということを実感しております。帰ってきた後、幸い富山県との関係、高岡の法科大学の先生であるとか、あるいは富山県の優秀な企業のお手伝いとか、富山には頻繁に帰ってきています。

　今回こういう重要な計画の策定に加えていただいて大変ありがたいと思っておりますけれども、この計画を、こうやってここにいらっしゃる皆さんと一緒に担う以上、どういう心構えでこれに取り組んでいくかということをずっと考えていました。

　今日、資料を見させていただいて、非常によくできた資料です。ただし、富山県を取り巻く環境変化、１５ページにある５つの課題、人口減少、少子高齢化、自然災害の激甚化、これは富山だけの話じゃないですよね。恐らく日本中の、場合によっては世界中の人たちが取り組んでいる課題であって、富山県以外のほかの県でも同じように、こういうような課題に取り組んでいる人たちがたくさんいるんじゃないかと思うんです。そういう人たちと同じような目線でこの課題に取り組むというか、やっつけるというのはちょっとやりたくないなと思っています。

　そういう意味で言うと、私が思い出しますのは、例えば私の母の小学校の同級生であった中沖知事、この方が当時、富山は裏日本でどうしようもないと思っていた我々に対して、いや、富山というのは日本でも有数の住みやすい県なんだと、自信を持てと言われたのを思い出しますし、さらに、もう少し直近の例でありますと、森元富山市長、この方が、いわゆる日本中が取り組んでおりました地方の空洞化に、コンパクトシティーという極めて卓越した知恵で取り組まれた。我々富山は、そういう日本に先駆けて、まさにお手本となるようなソリューションを打ち出す、そういう力があるんだということを思い出して、ぜひこの課題に取り組みたいと思います。

　そういう中で、いろいろな課題に対して、新田知事もおっしゃったように、実効的で効果が上がる、そういうような具体的な政策をぜひ考えたいというのが一つと、それから、政策を考えるに当たって、２つ、実はその政策はカテゴライズできると思います。

　一つは、例えば人口減少、少子高齢化、これはもうどうしようもないと、そういう中でどういうふうに我々は心の安定、あるいは社会の安定を保っていくかという考え方が一つと、しかし、そうでありながら、どれぐらい実効性が担保できるかどうかはともかく、具体的にパイが減っていくところをほかの県と取り合うのではなくて、パイが増えていく、人口減少を食い止める、あるいはもう少し反転させる、その上で経済においても生産性を上げていく、富山県における産業を魅力的なものにしていくというパイを増やすという方向性があると思うんですけれども、そのパイを増やすということについても、ぜひ考えていけないかと考えます。

　例えば、人口減少において非常に大きな課題として上げられるのは、若い女性の方が地方から都会へ流れていくという話と、それから２つ目は、子育てのコストというのが基本的には女性に非常に重く降りかかっていて、結果として子育てが進まない、婚姻が進まないという、この２つの方向性があるかと思います。

　幸いＭ字カーブについて私は大変力づけられたのは、富山県においてはＭ字カーブは非常に緩和されていて、そういう意味では、Ｍ字カーブが激しくなっていく理由である、例えば地方における男女の賃金の格差であるとか、あるいは待遇の格差、こういうものが富山にあっては相対的に少ない結果、この部分が緩和されているのかなと、さすが米騒動のときに女房一揆と言われた、女性たちの活躍が伝統として生きている富山県の強さというものをここで感じますし、さらにこの点に向かって、富山では男女間の賃金格差が一切ない、あるいは待遇の格差が一切ないと、そういうような政策を全国に向かって打ち出せないかなとちょっと考えました。

　それから、２つ目の子育ての面なんですけれども、これはこの間、本を読んでいましたら、日本だけが直面する問題ではなくて、ある程度成熟した資本主義経済の国全てが直面していて、その理由は、子育てというのは昔、女性が働くことについて制限がかかっていたときには、必然的に結婚をするという、そういう道しか選べなかったわけですけれども、女性が活躍できるようになれば、自己実現との関係で子育てというのは大きく自分の時間を取られるということもあり、これは女性の問題だけではなく、子育てというコストを女性だけに負わせるのではなくて、社会全体としてどれだけそれを負担できるかと、そういう問題だと思います。

　幸い今回いただいた資料の中には、様々な課題を解決する手段として社会制度、新しい社会経済システムの構築というのがあって、これまで子育てを女性たち、あるいは家庭に全部負わせていたのを、何とかそういう方向性に持っていって、富山においては、女性は子供が生まれても、ほかの場所に比べるとはるかに低いコスト、あるいははるかにスムーズに子育てができるというような仕組みができないかということもちょっと考えていました。

　やや雑駁な議論になっていますけれども、最後に申し上げたいのは、この作業を単なる一過性の課題として捉えるのではなくて、これを機会に我々は本当に意味のある、具体性のある施策を１つでも２つでもつくり上げ、それを日本全体に問う、その結果、このソリューションが、例えば富山方式あるいは新田方式、そういうふうに将来記憶されるような成果が生まれるような方向で努力できればなと、大風呂敷で恐縮ですが、そういうふうに考えました。

【米山委員】

　よろしくお願いします。富山県砺波市から来ました合同会社シュシュの米山といいます。

　私自身も高校まで富山にいて、大学から県外へ出て、東京で厚生労働省というところで少し働いて、その後、作業療法士として医療の現場で働いていました。

　３.１１があったときに富山に帰ろうと思って帰ってきたんですけど、本当に富山には全てあったと思って帰ってきています。今はすごい豊かな子育てをさせてもらっていて、自然を味わえる森の幼稚園に通ったり、私自身、総曲輪というところが私の地元でもあるんですが、今は砺波の山のほうに住んでいて、すごい豊かな暮らしをさせてもらっています。

　そこには結構、県外出身のお母さんがこぞって集っていて、富山はすごくいいところ、自然がすぐそこにあって、県外のお母さんのほうがすごく楽しんでいる様子で、さらに３０代から４０代が集まっているんですけど、皆さん出産が進んでおりまして、委員の皆さんの意見を聞きながら、何でだろうなと思って考えていたんですけど、やはりそこでは皆さんでたき火をしたりとか、共同作業を子供とお母さんたちですることで、みんなで育て合うというところがすごく育まれていて、なのでみんな安心して産めるかなと思うところがあるのかなと、今、私が経験したことで言えることはこれかなと思っています。その中で、皆さん結構自分の自己実現も進めていて、自分で起業したりとか、そういうお母さんもたくさんいて、自己実現と、産んでもいいかなというか、安心して育て合える仲間がいて、さらに今、佐伯委員が言っていた生きる力、子供も生きる力がついて大人も生きる力がつくと、すごく子育ても安心して、子供を産んでもいいかなと思えるようになったのかなと思います。

　このウェルビーイングというところにつながっていくと思うんですけど、こどもまんなかになっていくには、私も自分なりに考えていたことは、やっぱり大人がワクワクする姿を見せていく、子供は結局、大人の背中を見ているので、大人がこうやって安心して楽しんでいる様子を見せることが、こどもまんなか教育になっていくのかなと私自身は思っています。

　なので、今、富山は自然も豊かで災害にも強くて、すごく県外から魅力ある地域だと思うので、そういう資源を使っていければなと思います。

【麦野会長】

　それでは、ここまでの御発言、御意見に対しまして、一旦、新田知事のほうからコメントいただきたいと思います。よろしくお願いします。

【新田知事】

　ありがとうございます。大くくりに人づくりというグルーピングで最初の御発言をいただきましたが、人づくりに限らず、本当に多岐にわたっての御意見をいただきました。改めて、今回のこの審議会の人選、間違っていなかったんだなと思って、大変うれしくお一人お一人の御意見を伺っておりました。

　とてもこれをすぐにまとめるような能力は私にはございませんが、一つは多様性ということについて多くの言及をいただいたと思っております。これは日本人の中、富山県人の中での多様性ということ、それからまた、今、１００万人のうち２万２,０００人の外国人が富山県に暮らしておられます。この方々を交えた多様性のこと、これらをしっかりと、それぞれの方々を育みながら、そして生きやすく、暮らしやすく、そんな富山県にしていくことが大切だと思いました。

　この観点で、今、富山県では、在留外国人と共生する富山を実現する、そのような条例を制定してはどうかという議論を始めています。条例をつくることによって外国人材との共生を着実に、そして確実に進めていくことが大切なのではないかと、それが不確実で先が読めない時代にあって、やはりこれに対応するには、いかに多様な視点で物事を考え、政策をつくっていくかということが大切になると思います。そういった意味で、この多様性というものを富山県の今後の大きなドライバーにしていきたい、いくべきだという御意見を伺ったと思っております。

　また、やはり人づくりといいますと、次の時代を担う子供たちのこと、教育をどうしていくのか、そのようなことだと思います。今、富山県の教育は、なかなか先が読めない時代にあって、まず問題を発見して、そして、それを解決していく能力、それも解決していく上で多くの友達、仲間たちとともに取り組んでいく、こんな能力をつけていくことが大切ではないかという基本的な考えの下に富山県教育を行っています。

　そして、そんな子供たちを中心に据えて、富山県をつくっていく、いわゆるこどもまんなか社会ということを目指しています。

　これについても、着実に確実に進めるために、今、こどもの権利に関する条例の制定に取りかかっております。これもやはり大切なことだと、改めて皆さんの御意見をお聞きして思いました。

　また、人づくりの上での環境という面で、今、富山大学では楽しい、おもしろい大学を目指しておられるということ、石破総理は楽しい日本を目指しておられます。そして我々、富山県はワクワクすることがたくさんある富山県を目指しております。この上で、決して外だけに参考例を探すのではなくて、我々の先人たちも大変にすばらしいことをやってこられた、改めて、ここにも大いに学ぶ必要があるのではないかという御意見もいただいたところでございます。

　以上、第１番目のグループに対するコメントとさせていただきます。

【麦野会長】

　では、続きまして、産業やインフラ、県土強靱化などの社会基盤づくりに関するグループの皆さんの御意見をいただきたいと思います。

（以降、順次指名により発言）

【大橋委員】

　富山県建設業協会の大橋と申します。

　建設業の意見を申し述べる前に、私は子育て支援・少子化対策県民会議の会長もしておりますので、その立場から一言だけ触れたいと思うんですけれども、今の富山県の人口減少、とりわけ社会減、それも若い女性の転出超過というのは極めて大きな問題で、これに対して魅力ある産業を富山県内につくっていかなきゃいけないと思っています。

　また、少子化の要因の一つとして、若者は決して結婚したくないと思っているわけじゃなくて、その機会が少ないことも要因にあろうかと思います。そうしたサポートも必要ではないかなと思っています。

　今、富山県では全ての産業において担い手不足が顕著になっていると思います。とりわけ建設業においては、ここ１０年で約１３％の担い手が減少しておりますけれども、従業員の平均年齢を見てみますと、非常に高いレベルにありまして、この傾向はさらに加速度的に進んでしまうのではないかと。そうなりますと、今、自然災害の激甚化、頻発化、これは地震であったりとか、水害であったりとか、あるいは大雪もそうでありますけれども、そうしたものに対する対応力が著しく劣化してしまっているということが問題だろうと思っています。

　あまり認識されていないかもしれませんけれども、能登半島地震が起きた際、人命救助のために消防隊や自衛隊の方々が現地に入る際に、地震によって特に橋の前後が大きく沈下して車両が通れない状況になります。それを現地の建設業の方々が道路啓開ということで車両を通せるようにしているわけでありまして、彼らも被災者でありながら、まずは社会のためにそういった努力をしているわけです。

　まさしく我々建設業というのはエッセンシャルワーカーだと思っておりますけれども、なかなか建設業がエッセンシャルワーカーだという認識はされていません。我々が担い手を確保して県民の安全、安心を守っていく、そんな産業になるためには、まずは自助努力が何よりも大事だと思いますけれども、一方で、我々がエッセンシャルワーカーだという社会認知を広めていくことも大事だと思っていますので、こういったこともこれから意見として述べてまいりたいと思います。

【加賀谷委員】

　富山大学の加賀谷でございます。私は工学部で応用科学、その中でも分析科学という分野を教育研究しております。

　資料の２７ページのところのビジョンと目標のところで、持続可能でしなやかな富山県という目標が掲げられていますけれども、これは現状を維持するという意味ではなくて、恐らく持続可能な開発をしながら、左にあるワクワクする、そして右にある、みんなで創る富山県というのにつなげていくというふうに理解をしております。

　持続可能な開発をしていくためには、経済開発、経済的に豊かになるということは一つあると思うんですが、もう２つ、社会的な包摂と、それから環境保護ということを忘れてはいけない、これは持続可能な開発の大きな３本柱でございます。そのあたりも含めて具体的な計画を立てていく必要があろうかと思います。

　もう一つ、私の実際に今、教育研究をしている分野についてのお話をさせていただきます。私は分析科学という分野を教育研究しているんですが、今、分析業界では様々な機材、それから材料を使って分析をしています。

　ところが現在、大企業のほうで再編、統合、そういった流れがありまして、そういった分析機材ですとか、材料をつくるような企業が一部大企業のほうに吸収され、そして大企業は利益の効率化ということをもちろん目標に掲げておりますので、何となく利益率の薄いそういった分野をなかなかうまく回してくれない。結果として、材料の供給が停止するというようなことが起こっています。

　その結果、何が起こっているかというと、材料がないので分析がうまくいかない、それから、世界で使われているので、世界の各国の友人からどうなっているんだ、何で供給しないんだという問合せが来たりしています。そういったことというのは我々の分野だけではなくて、いろいろな分野でも起こっているのではないかと推測しているところです。

　そこで一つの考え方として、そういった大企業で利益が出ないわけではないんですが、いまいちというところを、うまく小回りの利く富山でやって、そして、それを世界に発信して、富山の名前、メードイン富山というようなものを発信していくというのも、先ほど来いろいろ話題に上っていますグローバル化につながっていくのではないか。そういった活動を通してグローバル化ということで、人材の育成が始まり、かつ、そういう人材が富山に定着していく。

　製造に関してはノウハウがやはり必要になってくると思うんですが、例えば高齢者の方をうまく活用して、小回りを利かせながら、高齢者の方が若手の能力の教育等を行っていくというような、何かそういううまいサイクルをつくっていくといいのかなと思っていて、これは大都市ではなかなか難しい話ではないかなと。むしろ富山のように住みやすいところでそういう動きがあると、非常にいいのではないかと考えていたりもするところです。

　そういったところが、少しでも次の富山県の目標に盛り込まれるといいのではないかと意見させていただきまして、終わらせていただきます。

【大門委員】

　富山県経営者協会の副会長の立場で出席をさせていただいております。

　私の思っていること、３点ほどございます。

　まずは、富山県の一番大きな問題点、これは皆さんが言っておられるように人口減少と少子高齢化だと思っております。人口減少を防止する手だてはなかなか難問でありますけれども、その減少率を少しでも緩やかにする方策はあると思っております。そのためには現在のこどもまんなか富山、この積極的な推進とブラッシュアップを継続的にやっていくということでないかなと思っております。

　２点目は、少子高齢化による働き手不足が全ての職種で感じられております。計画的な人員の採用というのは厳しい状況にあります。しかしながら、一方では元気な高齢者が増えておりまして、６５歳までの定年延長や７０歳までの雇用確保、これが現在、事業主の努力義務となっております。近い将来には事業主の７０歳までの雇用確保というのが、努力ではなくて義務になるというのは容易に想像できます。そのためには、やはり高齢者の方々の仕事の内容や賃金、就業の頻度など、いろいろな知恵の出し方を工夫しなければならないのが、事業主の責任となってくるものと思っております。大企業、中堅企業、中小企業、おのおのでの知恵の出し方があると思います。そういうものも、また、この計画の中で議論をしていければいいかなと思っております。

　そして、現在、富山県にある社会インフラとして富山県には３つの港湾と２つの鉄道貨物駅があります。特に港湾と鉄道貨物駅を積極的に利活用しまして、モーダルシフトを推進し、環境負荷の低減を図りながら、カーボンニュートラルを目指すとともに、激甚災害が起きたときには、昨年の能登半島地震のときも伏木富山港を積極的に利用していただいて、初期救援活動として海上自衛隊の方々が一生懸命やられたということを十分に心得ております。港湾の利活用と鉄道貨物駅の利用というものを考えながら、カーボンニュートラルを目指していければいいのではないかなと思っております。

【唐山委員】

　よろしくお願いします。私は富山県立大学のＤＸ教育研究センターの所長を務めております。

　その立場でいろいろとお話をさせていただきたいんですけれども、まず、私は富山に住んで１５年です。本当によいところだと思っていて、都会の騒がしさもなく、何よりも私がすごくすばらしいと思っているのは自然が豊富だということですね。先ほどまでもいろいろと議論がございましたけれども、今の富山にいる子供たちには、ぜひそういう富山のすばらしいところをたくさん味わってもらって、それをいつまでも体験できるようにしてあげられるといいなと思っております。

　それが前提なんですが、これまでにお話のあった中で、人づくりの中では、私は横井委員の御意見がすごくしっくり来ていて、課題としてはすごくたくさん難しい課題はあるんですけれども、やっぱり重要なのは、こういう言葉でいいかどうかは分かりませんが、富山の目玉商品というか、独自性、富山でしかできないというものがあると、やはり人も集まってくるんじゃないかなと思っています。富山の何か目玉商品が欲しいということですね。そういうものが、この会議でいろいろ議論できるといいかなと思っています。

　つまり、富山はどういう都市になりたいのか、こういったことを富山県民の皆さんが議論に加わるべきかと思っています。ウェルビーイングは非常によいキーワードで重要だと思います。それ以外にも何か目玉商品になるようなものがあれば、そういうものを出していくべきかと思っています。

　それで、事務局のほうからもいろいろな課題や目標を御説明いただいたわけですけれども、決してこれを縦割りにするのではなく、できれば有機的につなげるような議論をしていくといいかなと思っています。つまり、こういう課題を横串で考えると、実は一つのアイデアで複数の課題が解決するというものも十分あるんじゃないかなと思っています。

　それで、私の立場から言いますと、やはり全体を通してデジタル、情報、こういった技術をより富山県に浸透させるということ、これはもう避けられない、必須であると思っています。情報技術はあらゆる分野に波及するもので、とても重要であるので、できる限りここに予算をどんどん投入して、いろいろな方に技術を獲得してもらうということが非常に重要なのかなと思っています。

　さらに、産業や技術、テックの観点で言うと、まず企業における経営者の皆様には、デジタル化といったところについて、よく御理解をいただく必要があるのかなと思っています。私どものＤＸ教育研究センターの中でも、いろいろな企業に来ていただくんですが、そういうところで少し見えてきているのは、デジタル化がちょっとよく分からないという方もまだいらっしゃるので、そういった方々によく勉強していただいて、導入していただく、情報技術を高度化していただくということが必要かなと思っています。

　そういったことをしながら、最終的には雇用の創出というのは大変重要だと思います。これはもう本当に一つのジャストアイデア、単なる私のアイデアなんですけれども、雇用をいかに創出するかというのはすごく難しいんですが、例えば、何か学園都市のようなものをつくってみるとか、そういうことをすると、いろいろな企業や、大学の研究者もそうですが、そういう人たちが外からたくさん集まると思います。少しぶっ飛んだアイデアかもしれませんが、そういうところもこの会議で議論できるといいのかなと思っています。

　例えば、スタートアップのことをお話しすると、これがたくさん出てくるというのは非常にいいことだと思います。その中でも知財の特許とか、そういったのを含めて、知財をもってスタートアップを維持したり、拡大したりできるかどうかというのはすごく重要なので、知財戦略、こういうところも大変重要かなと思っています。

　あとは、教育面でお話しすると、日本の高専、これは実は今、世界的にすごく評価されてきています。高専というのは１５歳で入学して５年間一貫で専門性を磨くわけです。富山の高専の生徒さん、すごく優秀です。ですので、そういった高専の皆さん、あるいは高校の皆さん、そういう皆さんからどんどん専門性を身につけていただくような、大学との連携とか、企業との連携とか、最新の技術を学んでいただくとか、そういうことを積極的にやっていくというのも、一つ重要かなと思っています。

　いろいろお話ししたいことがあるので、また次の機会にお願いしたいんですが、まとめますと、課題、目標を縦割りにするということではなくて、できる限り有機的につなげて議論したほうがいいのかなと思います。あとは富山の目玉商品とは何かということをしっかり議論できるといいのかなと思いました。

【中澤委員】

　　中澤です。富山県銀行協会の会長をしています。

　銀行というか、経済圏のくくりで見ても、知事からはＧＤＰそのものが絶対ではないというようなお話もいただいたんですが、そうは言うものの、そういったものが縮んでいくといったことは、我々も死活問題だと思っているところなので、そこをどう底上げしていくかということを、我々自身が自覚して進まないと、先ほどから皆さんがおっしゃっているように、産業のビルドとか、人とお金が集まってくるという仕組みはなかなかやはりつくれないのかなと思っています。

　富山県だけじゃないんでしょうけど、北陸３県は昔人口が相当、全国的に見ても集積した地域で、繊維や貴金属、富山は医薬品など、優れた産業があって、所得、貯蓄率が高くて持家数も高かったということで、そこに誇りというか、外からも羨ましがられたという、そういう認識だった。ですけど、昨今、若い人たちが戻ってこないというのは、それを上回る魅力のある業態が出てきてしまったといったことで、本当に富山県には従来型のニッチトップ企業も伝統産業も含めての強み、これは北陸３県で比較しても非常に突出したものがあるんですけど、なかなか、そこからさらにプラスアルファの産業が、我々銀行の問題でもあるんですが、構築されていないなと思っています。

　ですから、人とお金が集まる仕組みの中では、先ほどお話が出ましたけど、スタートアップというものが、この大学発ベンチャーが３社から１２社に増えたというのは、一応伸び率としては高いんですが、大学の数の問題もあるんですけど、残って地域に貢献したいという思いでの起業というものを、どう教育面も含めて構築していくか。我々自身が仕組みをつくっていくということもそうでしょうし、もう一つは、外からお金を引き込んで、人が入ってくるということを考えたときに、やはり我々地元の経済圏を挙げて、ワンチームのような格好で新産業を呼び込めるというような、それこそスタートアップチーム、政府がいろいろ半導体とかやっていますけど、ああいう特区に近いようなものを我々自身でフレームとしてつくっていかないと、なかなか大きく変わっていかないなと、それぐらいの本気度が必要かなと思っています。

【延野委員】

　ＪＡ富山中央会の延野でございます。日頃ＪＡグループはもとより農林水産業グループの活動に御理解と御協力をいただいておりますことを厚く感謝申し上げます。

　さて、農林水産業は御存じのとおり、食料供給はもとより県土の保全等の多面的な役割を担っており、県民の命と暮らしを支えております。

　一方で、参考資料１３ページに記載のとおり、農林水産業は就業人口が大幅に減少するとともに高齢化が進んでおり、今後、人材確保が困難になることを危惧しております。

　また、参考資料の１９ページから２１ページに記載がされているわけですが、気象変動等による災害に今後も見舞われることを危惧せざるを得ません。特に食料の生産基盤は、一度失われますと、すぐには元に戻すことができず、国際情勢の不透明さの中、食料安全保障の観点からも、農林水産業の持続的な発展が重要になっていると思っております。

　つきましては、従事者が夢と希望を持って農林水産業に従事できるような新たな総合計画を策定していただきたく、まずは、参考資料１６ページ記載に準拠した農林水産業の労働需給シミュレーションを行って、その結果も踏まえ、次の主な視点で対応していただきたく、よろしくお願い申し上げたいと思っております。

　１点目でございますが、能登半島地震被害を受けての農林水産業施設の復旧と経営支援対応、及び今後も想定され得る災害被害に向けて、先ほど大門委員も触れられたわけでございますが、施策の整理対応。２点目は、食料・農業・農村基本法でうたわれております食料安全保障の確保、環境と調和の取れた食料システムの確保、農村の振興に沿った対応。具体的には、スマート農業と基盤整備の組合せによる生産性の向上対応、高温耐性品種の切替え等の温暖化に対応した産地づくり対応、人口減少下で増える後継者のいない農地の受皿となる担い手の確保と育成対応、生産基盤を守るための県産農林水産物の消費拡大や輸出等による販路拡大対応。３点目でございますが、ウッドチェンジによる県産材の活用と森林資源の循環利用の促進対応。４点目は、新たな栽培漁業、養殖漁業による水産資源の増殖や漁村、漁協の魅力を活用した海業、つまり海の業の推進対応。

　以上でございます。よろしくお願い申し上げます。

【浜守委員】

　連合富山の浜守です。ちょうど私ども今、春季生活闘争ということで、いよいよ賃上げの交渉がスタートします。今年は昨年を上回る賃上げの実現ということで、取組みの強化をしていく予定であります。

　ただ、そのベースとなる考えで、私のほうから各構成組織、加盟組織のリーダーの皆さんにお願いしていることが２つあります。１つは、物価高をきちっと認め合ってくださいということであります。昨年はコロナ禍、円安、物価高、こういった三重苦の中での取組みでありましたが、今年は職場組合員に物価高をきちっと理解していただく取組みだと思っております。物価高を理解した上で、それを上回る賃上げを実現し、そして日本の経済を回していこう、こんな仕組み、ロジックの中で取り組んでいこうということで今求めておりますし、正しい時代観と事業観と経営観を持ってくださいということもお願いをしております。これが１つ目です。

　２つ目は、もっともっと産業課題の前進をきちっと労使間で話をしていっていただきたいということであります。いわゆる産業課題の前進、政策制度の前進であります。物流の２０２４年問題、またエネルギーの政策課題、さらには半導体の供給課題やものづくり産業の課題、また地域の公共交通の課題、こういった課題を企業間の労使の中でもきちっとお互い課題共有を図ってください。そして、できることなら全国共通にこういった課題を進めていきたいということで、今ちょうど方針を立てている最中であります。ぜひそういうことも踏まえて、競争力のある産業基盤の構築に向けたワクワクした富山県を目指して私どもも一生懸命やっていきますので、ぜひそういった計画も盛り込んでいっていただきたいと思っております。

【藤野委員】

　皆さんこんにちは。レオス・キャピタルワークスの藤野英人でございます。富山県出身でもあり、またこれまで富山県の成長戦略会議のメンバーとして、またスタートアップ支援戦略PTの座長として議論しておりました。今回、この重要な審議会の場で富山県の未来について議論できることを大変光栄に思っております。

　富山県には優れたものづくり企業、豊かな自然環境、皆さん御指摘されているとおりですね。あと、勤勉で誠実な県民性という強みがあるということですが、これも御指摘のとおり、人口減少、若者の流出、新しい産業の創出といった課題にも直面しているということです。

　しかし、富山には非常に大きな伸び代があると私は考えております。特に、今、県のほうで、ウェルビーイングを軸にした産業社会基盤の整備が不可欠であると言っていますが、これは大きな伸び代であると思っています。

　これからの１０年間、富山県が成長するためには、単なるインフラ整備にとどまらず、ウェルビーイングを支えるというような意味での新しい産業社会基盤を築く必要があるのではないかと思います。

　例えば、デジタル技術を活用した次世代のものづくり基盤の強化、都市と地方のデュアルライフを支えるスマートインフラの構築、あと、私自身も今、実際の仕事でも関連していますが、スタートアップですね。このスタートアップと地場企業の連携によるイノベーションエコシステムの形成などが挙げられると思います。

　また、地域の働き方改革を進めて、リモートワークやワーケーションなどを通じた都市部から人材を流入するような施策をどのようにするのかということが重要ではないかなと思います。

　これらの取組みにより、人が集まりたくなる富山、私がとても大好きなスローガンですけれども、これが幸せ人口１,０００万人をつくるための大きな考え方ではないのかなと思っております。

　産業社会基盤の整備は単なるハードの充実ではなくて、県民一人一人のウェルビーイングを支えることが重要ではないかと思います。この審議会が富山県の未来を築くための実践的な議論の場になることを期待しておりますし、私も金融と成長戦略の視点から積極的に関わり、富山の発展に貢献したいと思います。

【松田委員】

　北陸電力の松田でございます。

　今回の計画、前回と大きく異なる経験をしたことの一つは、やはりこの大きな震災を踏まえたということだと思います。本当に我々もネットワーク中心に、電気の供給に際しては随分大変な思いをしました。そのときいろんな連携もさせていただいたりして切り抜けてきたわけですけれども、非常に重要だと認識したのは、ハードだけのレジリエンス強化というのは限界があって、やはりソフトですね。これをしっかり充実しないと、なかなか機能しない。今回もいろんな方々との、情報が錯綜する中での連携が必要だったり、あるいはいろんなルールの壁があったりして、意外とこういうときなのにこういう壁がある。こういうことはしっかり平時のうちにみんなで認識を共有して、変えるところは変える。こういう変えるような仕組みを今回の計画の中で入れていただきたいのが１つ。

　もう一つは、地域の経済、社会のシステムの改革なんですけれども、一つの視点、これは全体を通じて入れていただきたいと思うのは、本当に先ほどから富山県というのは魅力のある地域であって、豊かな自然環境もありますし、高度な技術力もあります。そして人材も豊富です。これらをベースにしながら、地域でまずこれをどう強化していくか。それともう一つ大事なのは、地域で生んだ富を富山県、北陸の中でどう回していくか、この連関が非常に重要だと思います。

　したがって、地域の循環型経済、循環型経済社会、人もそうです。せっかく優秀な人材がいらっしゃるのに流出してしまう。これはいろんな面で連関してきますので、やはりここで得た富は、富山県、そして富山県だけでなければ北陸、これは気候も文化も歴史も近いものがあります。今、３県の知事も相当連携もできています。そういうことを生かしながら、北陸というのを一つのエリアとして日本の中で考えていくという視点が非常に重要だと思いますので、今回の計画の中でぜひこの視点を入れていただきたいと思います。

　そういう意味におきまして、本当に埋没した計画になることなく、少しキラリと光る富山県のワクワクした計画、これについて我々も全力を挙げて御審議させていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【村上（綾）委員】

　富山県防災士会の村上でございます。

　防災士は先日、１月１７日、阪神・淡路大震災から３０年目ということで、いろいろなニュース等にも取り上げられましたが、これをきっかけに防災士というのが誕生しております。全国で３万人、富山県においても３,０００人を超える防災士が誕生しております。地域の防災リーダーとして活躍をということで役割を担っております。

　今回、昨年の能登半島地震におきましては、富山県内においても非常に被害も出ましたし混乱も起こりました。そういった中で、実際に現場に出て避難所運営等に関わった上で、私たち自身も非常に課題ですとか、それから今後のことについて考える機会をいただきました。

　その上で、例えば年末年始に当たっては、ＤＥＩ、ダイバーシティ（多様性）、エクイティ（公平性）、インクルージョン（包括性）に沿った避難所運営ですとか、それから災害救助ボランティアコーディネーターといったような研修も受けております。

　その中で出てきておりますのが、やはり多様な機関との連携であったり、それから重層的な支援の必要性です。地域においてこういったことが可能になるようにというところで、これからも取り組んでまいりたいと思っております。

　地震ですとか自然災害というのは止めることはできませんけれども、備えること、それから対応できることで、それらを減らしたり、復旧・復興を早めることができます。私たち、現在は人口減による課題への向き合いを進めているところでございますので、そういった意味では、安心・安全な社会の共創に向けて、これから皆様と共に取り組んでまいりたいと思います。

【麦野会長】

　大分時間が押しぎみに進んでおりまして、知事のコメントは産業・社会基盤づくり、魅力づくり、併せてお願いできればと思います。誠に申し訳ございません。

　では最後に、まちづくりや観光、文化・スポーツなど魅力ある地域づくりに関するグループの皆さんにお伺いしたいと思います。

（以降、順次指名により発言）

【大井山委員】

　私は、公益社団法人日本青年会議所の富山ブロック協議会の大井山と申します。よろしくお願いいたします。

　私は、魅力の発信というところで、まずは人口減少、担い手の多様化、イノベーションの進化であったりグローバル化というところで、やはり経済発展の部分が重要かなと思っております。

　経済が発展するところに人が集まりますし、例えば子供を産めないというところに関しても、やはり経済がうまく循環していると、じゃ、もう一人子供を産んでみようかだったり、そういった勇気が出るというところもありまして、ここがやはり肝かなと。例えば今、富山県で、「寿司といえば、富山」を押し出されていますが、そういったようなシンボルですね。やはり富山に来る理由というのをどんどん膨らませていくべきかなと思っています。個人事業主、中小企業の発展というのが富山らしい発展を生むというところももちろんですし、ハードの部分でも何か富山といえばここみたいなシンボルが生まれれば、すごく面白いなと感じさせていただいているところでございます。

　また、私、まちづくりを行っている中で、子供の視点といいますか、学生の視点というところで感銘を受けることがありまして、例えばインフラの部分、公共交通機関の部分で、富山県はそういった部分に力を入れているということを自覚している、発信をされているということは聞いたことがあるんですが、やはり学生たちの目線で言うと、富山って公共交通機関が不十分だよねみたいな声が出たり、目線によってすごくギャップが出るというところを感じるときが多いです。

　富山から人が出ていくというところを抑制するためには、こういった世代の目線というところも理解した上で進めていかないと、ギャップだったり、こんなに頑張っているのに何でというものが生まれると思うので、そういった部分に力を入れて、コミュニティをしっかりとつくっていくというところに力を入れることが大事かなと思っております。

【片貝委員】

　私は富山県生涯スポーツ協議会に所属しておりますが、長年、富山県の皆様の健康づくりにおいて、いろいろプログラムをつくったり、それを皆様に御指導したりということで活動させていただいております。

　富山県では、２０００年国体もあったんですが、それを機に県の体操をつくるということで、県が主導し健康づくりを進めました。今では我が町、我が地域の体操ができ上がっておりまして、県が率先してまずお手本を示されることで地域に広がり、地域の皆様もそれに沿って考え行動されるんだなということを実感しております。

　健康日本２１というのが厚生労働省で策定されておりまして、２０００年にできたときに健康寿命ということが提唱されて、それに向けて、県、そして地域の皆さんも健康づくりに物すごく力を入れてこられました。

　今、２０２４年に健康日本２１も第３次に入りまして、今までなかったキーワードとすれば、ビジョンで持続可能という言葉も入ってきましたし、大きな柱に誰一人取り残さない健康づくり、先ほど村上委員の言葉にもありましたけど、インクルージョンというキーワードがございます。それから、実効性のある取組みというこの２本の柱で厚生労働省が提示しております。

　私とすれば、健康づくりもこのインクルーシブ社会に応じたような、老若男女、それから障害者、健常者、もう全部混ぜて、私自身がよく言っているんですけど、ごちゃごちゃな空間といいますか、皆様が一緒になって取り組める活動というものを提唱したいなと思っております。

　例えばサッカーなんかでは、ウォーキングサッカー、走らないサッカーというのがあるんですが、もしその中に車椅子の方が１人入られたら、じゃ、どういうふうにみんなで楽しめるかということをみんなで考える。走らないということが大前提なんですが、そのほかに、車椅子の方も楽しめるような何かルールづくりをみんなで考えてゲームを楽しもうというような進め方、考え方もこれから大事なんじゃないかなと思っております。

【坂井委員】

　富山県商工会女性部連合会の坂井と申します。

　商工会の会員さんというのは、中小・小規模企業の方がほとんどです。そして、その企業にもお子さんはいらっしゃるんですけれども、なかなか事業継承できずに廃業される企業も、私の住んでいる庄川町でも、ここ３年ほどで多分１０社ほどあったんじゃないかなと思います。

　今日、県内の大学の先生がたくさんいらっしゃっているんですけれども、高校生の都会の大学に行ってみたいという気持ちもなかなか阻止できないとは思っています。でも、将来は富山県に帰ってきて富山県で就職したいと思ってもらえるように、まだ将来について真っ白な状態の高校１年生ぐらいまでの間に、富山県の企業のよいところとか、観光地のいいところとかを知ってもらえたらいいなと思っています。特に女性には戻ってきてもらいたいので、女性が活躍できる企業、楽しんで仕事ができる企業が増えてほしいなと思っています。

　そして、県外に出た学生さんには富山県の営業マンのようになってもらいたい。営業マンというのは、友達との会話の中で、「あなた北陸の出身だよね。どこに旅行に行ったらいい？」という会話がきっとあると思うんです。私も県外の大学だったので、そのときにそういう会話があって、たくさん友達も遊びに来てくれましたし、結婚してからも家族みんなで富山県に遊びに来てくれるという経験がありました。なので、富山県の人口減少はなかなか急には解決できませんけれども、交流人口は増やせるのではないかと思っています。なので、子供のときから富山県のよいところを知ってもらう努力をしたいと思っています。

【三宮委員】

　富山大学の芸術文化学部から来ました三宮と申します。

　専門は日本の古代の仏教美術でして、大学のほうでは日本美術史、東洋美術史、そして、前職の関係から博物館の学芸員養成課程というのを担当しております。出身は四国の高知県でして、就職でこちらに来まして１３年ほどたちまして、もう旅の人というよりほとんど地元になっております。

　その立場からちょっとお話しさせていただきますと、富山県はほかの地方に比べて博物館や美術館の数がとても多いんです。そして、その博物館や美術館の学芸員さんがとても一生懸命取り組んでいらして、特に県や、そして各市の博物館、美術館では、年間を通して非常に魅力のある企画展が展開されています。富山にいながらにして、世界の美術作品や歴史、そして日本の芸術、美術作品や文化というものに触れられるとてもいい環境だと思います。

　また、富山は伝統文化、歴史文化がとても豊かな県です。私の住んでいる高岡のほうでは、万葉の歴史であるとか、そして加賀・前田家の影響を受けた伝統工芸というものが盛んで、そういったものに囲まれて暮らしを営んでいるという環境でもあります。

　私としては、やはり県民の皆さんに、そういう豊かな芸術や文化というものを感じていただく、またそういうものに親しんでいただく、そういう在り方をこの総合計画の中にもぜひ盛り込んでいただきたいと思っています。

　そうしたことが皆さんの心を豊かにする、そして興味を持っていただいて幸せな気持ちを育んでいただく。また、子供たちには、そういう美術作品や歴史・文化に触れることで感性を育んでいただくというような在り方が示せればいいのではないかと思います。

　やはり、なかなか今日美術作品を鑑賞して明日成果が出るというものではないんですけれども、やっぱり積み重ねが、５年後、１０年後に人々の心の豊かさや幸せというものにつながってくると思いますので、そういった視点で取り組んでいければいいのではないかと思います。

【品川委員】

　トヨタモビリティ富山の品川と申します。交通分野、またそこから広がって、まちづくり分野の担当として出席させていただいているものと思っております。

　資料２７ページを可能であれば表示いただきたいんですけれども、この資料、大変共感する内容、まとめ方になっておりまして、非常に期待を持たせていただいております。

　担当分野ではないかもしれませんが、左上の人口減少と少子高齢化のところの最後の文章ですけれども、まさにこういうことではないかと思います。「人口減少を緩和する取組みと、将来の人口構造を踏まえた社会づくりが求められる」という、この２側面で人口減少問題に取り組むということではないかと思います。

　まず人口減少を緩和する取組みというところ、自然減、それから社会減をいかに食い止めるかということについては、やはり予算なり割ける人材、工数が限られているというところを鑑みますと、別の会議でも申し上げたんですけれども、意欲のある方にもう絞った取組みでもよろしいんじゃないかと考えます。例えば、もう一人お子さんが欲しいんだけれども、経済的な理由から躊躇されている方ですとか、結婚したい、パートナーが欲しいと思っていらっしゃるんだけれども、現在まだ見つかっていない方ですとか、また、会社をつくりたいと思っているけれども、そこにまだ至っていない方ですとか、地域おこし、村おこしをしたいんだけれども、お金や工数が足りていない方、意欲のある方を重点的に応援するということがいろんなリソーセスが限られた中では必要じゃないかなと思います。

　一方で、将来の人口構造を踏まえた社会づくり。先ほどグラフで、将来人口が８０万人から６０万人の間で減っていくということでありましたが、間の７０万人だったとして、我々は限られたリソーセスと人口の中でどう社会をつくっていくのかということを、先般も高校再編の件で教育委員会からすばらしい提案があったと思っていますが、やはり将来の人口構造を踏まえた社会づくりということを考える必要があると思います。

　私の仕事をさせてもらっています交通分野にしましても、県の地域交通戦略会議において、投資と参画という観点で、幹と枝と葉と、具体的には、各人口集積地域を鉄軌道、また公共路線のバスで結んで、そのターミナルから先は２次交通ということで、最近であればデマンド交通であるとか公共ライドシェア、自治体ライドシェア、そういった自助、共助、公助の観点で、人口減少社会の中での効率的な、また関係人口増大、観光客の増加、地域の住民の皆さんの利便性向上というような形のネットワークづくり、また、その核となるターミナルには魅力ある集客施設、また、にぎわいづくりに資する仕組みを民間の知恵を生かしながら、そして、民間ではできないことを行政のほうでしっかり旗振りですとか大がかりなプロジェクトを進めていただいて、官民一体となって、将来の人口構造を踏まえた社会づくりを進める必要があるのではないかと考えます。

　私どもトヨタグループの今年のインナーのスローガンに限量経営というのがございまして、「ゲン」というのは「減らす」じゃなくて「限られた」という字の「限」なんですけれども、限られたリソーセスの中で、本当はあれもやりたい、これもやりたいけれども、どう優先順位をつけて、またメリハリをつけて、そしてワクワクする、またレジリエンスな、全員参加型の、まさに投資と参画という観点でこれからの計画づくりをお願いしたいなと思っている次第です。

【前田委員】

　数ある地方都市の中から、日本はもとより世界中から、富山に住みたい、行きたい、つながりたい、関わりたいと思われる魅力というものを圧倒的な魅力、差別化、僕たち製薬会社で、製品の分析をするとピークの試験をするんですけれども、どういうピークを出すかということかと思います。

　次の観点に行きます。住宅と健康（ヘルスケア）、老後、教育が世界共通の四大支出になります。住宅というのは、この人口減の中、なかなか厳しいかと思うんですけれども、この分野に対して新産業をつくっていくということかと思うんですが、去年の年末に二地域居住促進法が制定されました。この観点と、この人生の四大支出、そして富山に最大のピークを出すといったときに、以前、「富山で休もう。」というポスターがよく出ていましたけれども、例えば「週末は富山で過ごそう。」みたいな形で、二拠点居住をするなら富山だと。それはなぜかというと、ウェルビーイング先進地域であり、関係人口１,０００万人をつくろうと本気でやっている県だからというような、圧倒的な魅力はこの二地域で住むなら富山だというようなところで、このまちづくりというか魅力づくりをしていったらいいんじゃないかなと思います。

【森川委員】

　富山県立大学工学部情報システム工学科の森川七菜子です。

　資料を見てまず感じたのは、１３ページの策定の趣旨のところの箇条書きの部分で、ちょっと抽象的で、どれに特に注目すればいいか分からなかったので、まずどれを解決するべきか課題への優先順位をつけて、それを含めることでより解決に近づくと感じました。

　また、私が特に優先順位が高いと感じるのはやはり人口減少の部分で、人口減少の中でキャリアを伸ばしたいという女性が多いと感じていて、アルバイトやパートの担い手などの労働力が減ることによる人材不足が問題だと感じています。

　私は現在、大学３年生で、就職活動を通して友人と会話する中で、自分のキャリアを築きたいという女性が多いように感じるので、これまで富山県ではアルバイトやパートの多くが再就職した主婦層であると感じていて、今後は両立志向の増加によって人材不足がさらに進捗すると感じられるので、これに対策していくべきだと感じています。

【山辺委員】

　山辺といいます。高岡市で主に中小企業のデジタル化の推進というのを仕事としてやっております。

　簡潔にお話ししたいと思います。

　昨今の問題の中で私が一番感じているのは、やはり若い女性がいなくなるというのは結構問題視されておりますが、私の中では、大学なり就職なりは一旦都会に出てもいいかなと思っています。実際私もそうでしたし、自身の子供たちもそうです。

　最近周囲では、結婚をして富山県出身ではない旦那さんを連れて戻ってくるというパターンが非常に多いと感じています。そういった方たちが戻りやすい環境をつくるのがすごく大事かなと考えています。

　それから、仕事でやっているデジタル化の推進なんですけれども、最近はスタートアップ企業というのも多くつくられていますが、ツールを提供する会社というよりはデジタル化を推進する人材、プロジェクトマネジャーになれるような人材が少ないように感じていますので、ぜひとも大学等でそういった人材の育成もやっていただいたらいいかなと思います。

【麦野会長】

　以上、本日御出席の皆さんからの発言をいただきましたが、欠席されている村上美也子委員から意見をいただいておりますので、事務局から紹介をお願いします。

【事務局】

　村上委員から４点御意見をいただいてございます。

　１点目、医療圏の見直しについて。人口減少が進展する中、県民に十分な医療を供給することができる医療体制を確保するためには、コンパクトな富山県であるからこそ、医療圏の見直しなど既成概念にとらわれない取組みが必要であるということ。

　２点目、人手不足の問題について。元気な高齢者には社会で活躍を続けてほしい。医療としては、健康寿命の延伸に向けて努力する。社会の仕組みとして、元気な高齢者が安心して働ける場所を増やしてもらえないか。そうすることが若い世代を助けることにもつながる。

　３点目、北陸新幹線の早期全線開通について。災害が頻発する中、東海道新幹線の代替となる北陸新幹線の早期全線開通に期待している。このことが全国の経済活性化にも寄与する。

　４点目、中小の介護、医療、福祉施設への支援について。人件費や資材単価が上昇する中、診療報酬、介護報酬は国で決められており、医療機関や介護事業者等は価格転嫁ができない状況にある。特に中小の介護、医療、福祉施設は大変厳しい状況にある。本来、国の制度ではあるが、県として介護、医療などへの支援、補助をしていただけないか。

　以上４点でございます。

【麦野会長】

以上で全ての委員から御発言をいただきました。皆様には貴重な御意見、誠にありがとうございます。

　私も一言だけお話しさせていただきますと、私の認識は、これは富山県だけではなくて、日本全体が今最も真剣に取り組まなきゃいけないことは、１つは東京一極集中の是正、もう一つは地方創生を本気で実現する、この２点だと思っております。

　東京一極集中は、首都直下地震の発生は何回も言われているんですが、最悪の事態をどう予想するのか、それはもう本当に恐ろしいことが予想されます。その非常時のリスク分散を確保するためにも、まずはここ富山の防災体制をしっかりするということが大前提でありますが、もう一つは、知事が提唱しておられます防災庁の富山設置をぜひ実現していただきたい。この努力を県民挙げてやっていければいいなと思っております。

　もう一つは、地方創生の推進であります。今回の石破政権においても、この１０年間を反省しておられます。そして、もう一度地方創生を再起動しようと、こんなふうにもおっしゃっておられます。

　東京と地方の格差、それを克服する地方創生というものは、従来はとかく道路、空港や公共インフラに目が向いておりましたが、今はまさしく少子化問題に焦点が当たっていると認識しております。

　ただし、どうして女性は帰ってこないのか、これはかなり言い尽くされていますし、分析は深まっていると思っております。そういう意味では、大胆にかつ早急に対策を実行していくというところまでもう追い込まれているんだという認識をまず持つことが大切であります。そして同時に、先ほどから皆さんがおっしゃっておられる意見もそのとおりだと思いますが、単なる人口政策とか少子化政策ではなくて、県民の多様化あるいはウェルビーイングを実現する横断的な政策として捉えて物事を考えていくべきではないかなと私は思っております。

　ここまでの意見に対しまして、新田知事から産業・社会基盤づくりと魅力づくりと併せてコメントいただければと思います。よろしくお願いします。

【新田知事】

　ありがとうございました。

　最初のグループでは人づくりについて様々な御意見をいただきました。第２、第３のグループでは、そんな人たちにどう活躍していただくのか、あるいは一旦県外に出られた方にどうやって富山に再び戻ってもらうのか、あるいは富山出身以外の方をどうやって富山に呼び込んでいくのか、そのような様々な御意見をいただいたところでございます。

　さはさりながら、社会減の状況、これをやはりまず何とかしなければならないというお気持ちが全員の底流にあるのではないかと思います。ぜひこの社会減を止めていきたいと考えております。そのためにはやはり、魅力ある仕事、魅力ある職場が大切だと思います。もちろん富山県の産業集積はすばらしいものが過去も今もあると思いますが、これらを今の時代にアップデートしていく必要があるのではないか、またイノベーションを進めていく必要があるのではないか。そこにおいてスタートアップを育んでいくということが、既存の産業をアップデートする上でも大いに私は役に立つのではないかと思っています。そんなイノベーションエコシステムというものを富山県につくり出していく必要があろうということであります。

　また、先人たちにつくっていただいたすばらしい港湾、道路、空港、鉄道などのインフラがあります。これらを徹底的に、メンテナンスをしっかりしながら使い倒していく、こんなことも必要だと思いました。

　また、様々な文化的な資産も多くあります。これらをやはり大いにアピールしていくということも魅力づくりにつながっていくのだと思っております。

　今日、それぞれの皆さんに御発言いただきまして、おおよその論点が出てきたと思います。今後、この審議会、回を重ねることによって、これらをさらに深掘りしていく、そして具体的な政策につながっていくように、皆さんにはお願いしたいと思います。ありがとうございます。

６　閉会